2019 教育研究発表会資料

和歌山大学教育学部附属小学校における

探究力の育成を目的としたカリキュラム・デザイン

和歌山大学教育学部附属小学校

1. はじめに

学習指導要領（平成２９年３月告示）において，以下の３点が学校の教育活動を進めていく上で重要となる視点として明示されました。

① 授業改善の視点としての「アクティブ・ラーニング」 ② 学校の独自性を生かしつつ子どもたちに身に付けさせたい資質・能力を育成するための「カリキュラム・マネジメント」 ③ 社会と学校が目的を共有し，協働して子供の育成にあたる「社会に開かれた教育課程」

本校においても，昨年度から，研究主題を「未来に生きてはたらく資質・能力の育成」と改め，育成を目指す「探究力」,「省察性」２つの資質・能力を育んでいくために上記３つの視点を大切にしながら，日々の教育活動にあたっているところです。

さて，研究２年次にあたる今年度は，２つの資質・能力のうち，探究力の育成にスポットをあて，研究副題を「探究力を育むカリキュラム・マネジメント」とすることで，**特に上記②の「カリキュラム・マネジメント」に焦点を当てた研究**を行っています。まだまだ研究の途中ではありますが,「探究力を育むカリキュラム・マネジメント（特にデザイン)」の方法を具体的に示し，研究の経過を発信することで，参会者の皆様から広くご意見をいただき，より一層研究を深めていくことができればと考え，本資料を作成いたしました。また，本資料が参会者の皆様の「カリキュラム・デザイン」の一助となれば幸いです。

2. カリキュラム・デザインとカリキュラム・マネジメント

本校における今年度の研究副題は前述のとおり,「探究力を育むカリキュラム・マネジメント」です。本資料は，各教科等における「カリキュラム・デザイン」についての資料となっています。まずは，本校で共有している「カリキュラム・デザイン」と「カリキュラム・マネジメント」のちがいについて説明しておきたいと思います。

「カリキュラム・デザイン」とは

汎用性の高い資質・能力である探究力を育むため，一つの教科等に閉じるのではなく，子どもたちが様々な教科等において，身に付けた三つの力（知識・技能，思考力・判断力・表現力等，学びに向かう力・人間性等）を活用・発揮できるように同一教科あるいは教科等横断的な視点でカリキュラムをデザインすること（本年度は「知識」の活用・発揮に焦点を当てたカリキュラム・デザインに取り組んでいます。）と定義しています。

「カリキュラム・マネジメント」とは

デザインしたカリキュラムを実施した結果（子どもたちの学びの姿にかかわる調査や各種データ）をもとにＰＤＣＡサイクルで評価・改善を図ること（評価・改善に向けた組織の運営・管理も含みます。）と定義しています。

3. 本資料とカリキュラム・デザインの３つの階層

本校では，前述のとおり，カリキュラム・デザインによって知識の活用・発揮を促し，汎用性の高い資質・能力である探究力の育成を目指しています。

さて，「カリキュラム・デザイン」については，下記の３つの階層が示されています。

<カリキュラム・デザインの３つの階層>

① 教育活動全体の関係を「グランド・デザイン」として描く

② 学年の学習活動を俯瞰して「単元配列表」を描く

③ 一連の学習活動のまとまりとしての「単元」を描く

<田村学「『深い学び』を実現する　カリキュラム・マネジメント　文溪堂（2019）」より引用>

本資料は，②「単元配列表」を描く，③「単元」を描く　の２つについての資料となっています。

また，③「単元」を描く　については，知識の活用・発揮を促すカリキュラムをデザインする上で「教科等横断の視点を重視したもの」と「教科内での知識の活用・発揮を重視したもの」の２つを用意しています。

4. 本校のカリキュラム・デザインの特色

本校では，探究力を「目の前の未知の問題に対して，探究のプロセスを通して解決に取り組む資質・能力」と定義していることから，カリキュラム・デザインを行う際に「探究のプロセス」が充実することに重きを置いています。探究のプロセスが充実することで探究の質が高まり，探究力を育成していくことができるのではないかと考えているからです。

本校における「探究のプロセスが充実するようにする」ためのカリキュラム・デザインの特色をまとめると以下の３点になります。

<本校のカリキュラム・デザインの特色>

① 「知識」の活用・発揮に焦点をあてていること

② 「知識」が活用・発揮されることで，関連し合う教科等の探究のプロセス（課題設定，情報収集）が充実し合うようデザインしていること

※探究のプロセスは，課題設定，情報収集，整理・分析，まとめ・表現の４つで考えていますが，本校においては，「知識」の活用・発揮によって直接的に充実するのは，課題設定，情報収集のプロセスの２つであると考えています。

③ 「知識」には子どもの想いや願い，疑問なども含み，内容知，方法知，体験知などあらゆる知識を想定していること

上記①②についてもう少し詳しく説明したいと思います。

① なぜ，「知識」の活用・発揮に焦点をあてるのか？

文部科学省は，身に付けさせたい資質・能力を①知識・技能，②思考力・判断力・表現力等，③学びに向かう力・人間性等の３つに整理しています。その中でも特に知識に焦点をあてたカリキュラム・デザインを進めているのは，三本柱の資質・能力の相互関係から「知識」の定着や活用・発揮が特に重要であると考えているからです。このように考えているのには，理由があります。

子どもたちの学習における三本柱の資質・能力の相互関係を考えると，教科学習等で身に付けた「知識」を活用し「思考・判断・表現」することから，「知識」の活用が「思考力・判断力・表現力等」の高まりに大きく影響することは明らかです。そのようなことから，「思考力・判断力・表現力等」を高めるためには，学習で身に付ける「知識」の定着が不可欠です。また，単なる主体的な学びや学習意欲に留まらない「学びに向かう力，人間性等」を育むためには，「知識」の定着のみならず「知識」を活用した「思考力，判断力，表現力等」を高める探究的な学習が必要です。そして，探究的な学習の中で，「思考・判断・表現」し，新たな「知識」を得ることで，学びの意義を実感し学び続けること等，学びと自己のキャリア形成とを関連付けていくことも大切になります。

これらを踏まえると，「知識」は，「思考力・判断力・表現力等」及び「学びに向かう力，人間性等」を育む際の根底となる力であると考えられるため，「知識」の活用・発揮に焦点を当てたカリキュラム・デザインを進めることとしました。

② 「知識」が活用・発揮されることで，関連し合う教科等の探究のプロセスが充実し合うとはどういうことか？

本校では，「知識」が活用されることで，子どもたちが意欲的になったり，事象について詳しくなったりする等の子どもの様子が見られるようになることを「プロセスが充実する」と捉えています。それぞれのプロセスの充実と子どもの様子（例）の関係について示したものが次の表です。

＜表　充実する探究のプロセスと子どもの様子（例）＞

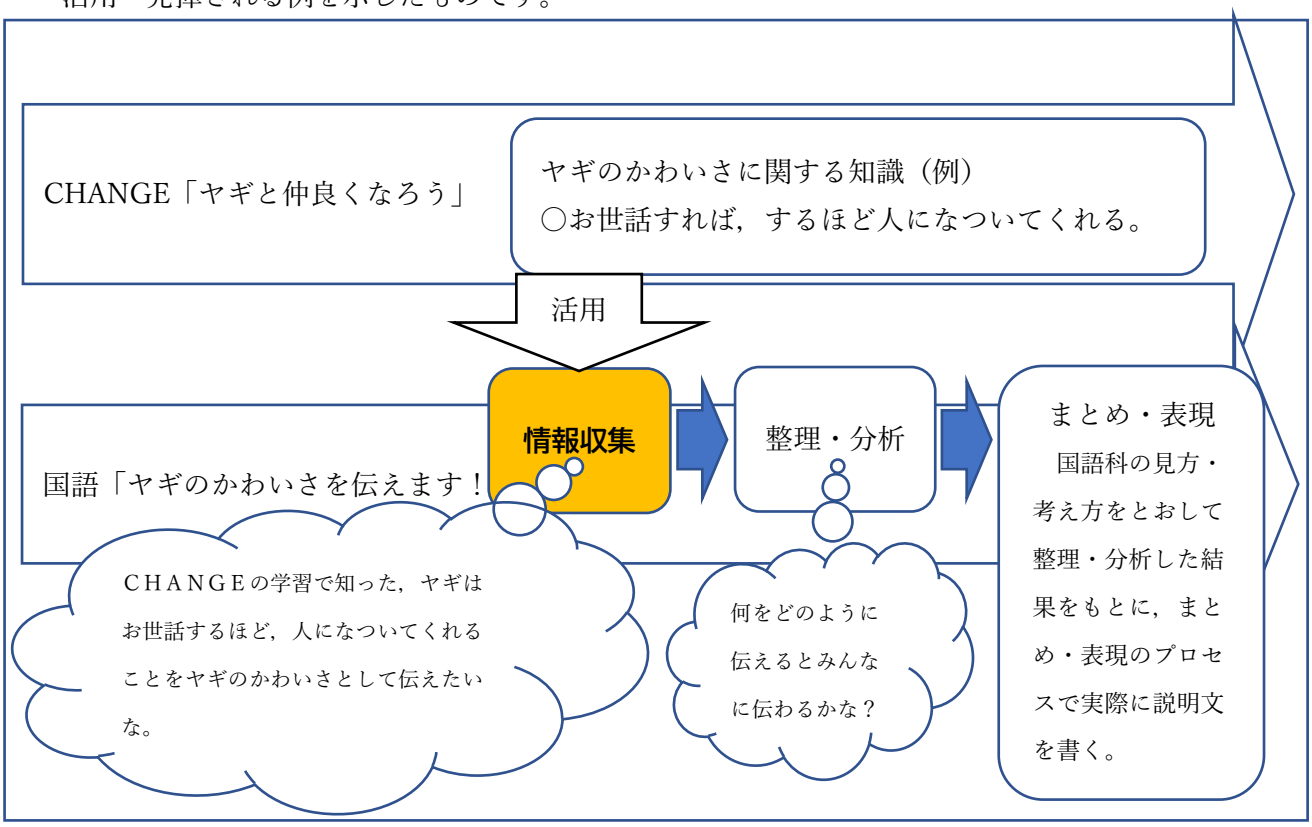
充実する探究のプロセス	子どもの様子（例）
課題設定	意欲的になる　自ら課題を設定する　問題意識をもつ　など
情報収集	情報が「補完」され，事象にくわしくなる　知識をためる　など

また，探究のプロセス（課題設定，情報収集，整理・分析，まとめ・表現）の４つのうち，「知識」が活用されることで，「課題設定」，「情報収集」の２つにおいてプロセスが充実し合う可能性があると考えています。なお，「整理・分析」，「まとめ・表現」のプロセスについては，知識の活用によって，プロセスが充実し合うことはないと考えています。なぜなら，「整理・分析」から「まとめ・表現」のプロセスにおいては，どのような場合でも，その教科等の「見方・考え方」が活用されながら学習が進むため，他教科等の知識がそのまま活用されることはないと考えるからです。

「整理・分析」から「まとめ・表現」のプロセスにおいては，知識の活用・発揮が起こらないと考える理由を具体例を挙げながら説明します。

図１は，CHANGE（総合的な学習の時間）の追究活動で得た知識が国語科の説明文を書く活動に

活用・発揮される例を示したものです。



＜図１：CHANGE（総合的な学習の時間）の知識と国語科の情報収集のプロセス＞

図１のとおり，この場面で活用される知識は，CHANGE の追究活動をとおして得た「ヤギはお世話すればするほど，人になついてくれる」という知識です。この知識は同時並行で進めている国語科「ヤギのかわいさを伝えます！」で説明文を書く際に，説明文で伝えたい内容として活用されます。このような知識の活用・発揮は，「情報収集のプロセスを充実させるもの」であると考えています。

一方で，「いや，ちょっと待って。それは，情報収集のプロセスではなく，まとめ・表現のプロセスが充実するんじゃないの？CHANGE の知識が活用されることで説明文を書く活動（まとめ・表現）が充実するわけだから。」と考えられる方が，いらっしゃるかもしれません。研究を進めていく上で，このような考えの相違が本校においてもありました。

しかし，この場面では，**直接的に CHANGE の知識が国語科のまとめ・表現のプロセスに影響したのではなく，次のような過程を経て，最終的に説明文を書く活動に生かされていった**と考えます。

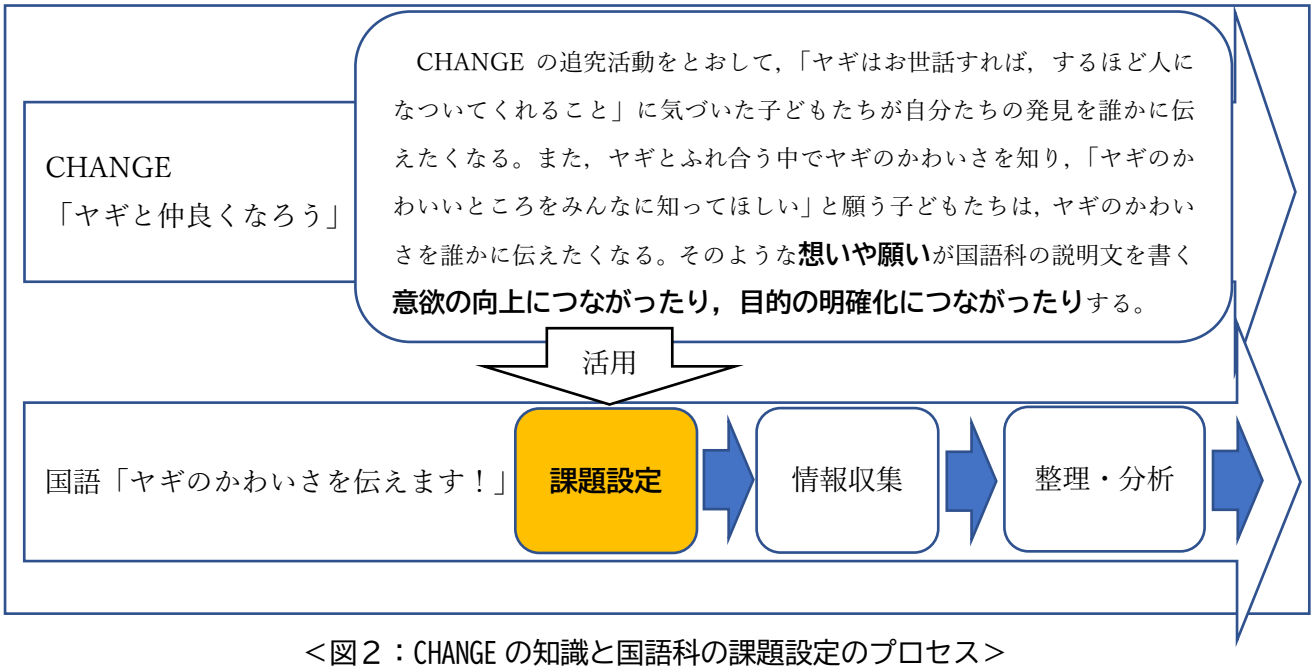
- CHANGE の知識が国語科の書きたい内容の１つとなる。（CHANGE の学習から，国語科において説明文で伝える内容の情報収集をしたことになる。）
- CHANGE の学習で身に付けた知識から情報収集してきた「ヤギはお世話すれば，するほど人になついてくれる」という情報を国語科の見方・考え方で整理・分析する。（何をどのように伝えるか考える。）
- 整理・分析したことを説明文で表現する。

このようにして，知識が活用されていくことは，CHANGE の学習で得た知識がそのまま，国語科のまとめ・表現に生かされるのではなく，CHANGE の知識からの「情報収集」に加え，国語科の見方・考え方をとおして，何をどのように伝えるか等，「整理・分析」し，説明文を書くことで「まとめ・表現」するということになりますので，CHANGE の知識が国語科の「情報収集」のプロセスを充実させたと捉えています。

「整理・分析」，「まとめ・表現」のプロセスにおいては，知識が活用・発揮される側の教科等における見方・考え方をとおして学習が進むため，知識の活用・発揮が「整理・分析」，「まとめ・表現」のプロセスを直接的に充実させるのではないという考えに至りました。

さて，「情報収集」のプロセスの充実について説明しましたが，同じ事例で「課題設定」のプロセスが充実することについても説明したいと思います。

「課題設定」のプロセスが充実するということは，「意欲的になる」，「自ら課題を設定する」，「問題意識をもつ」などの子どもの様子が現れることであると捉えています（図２）。

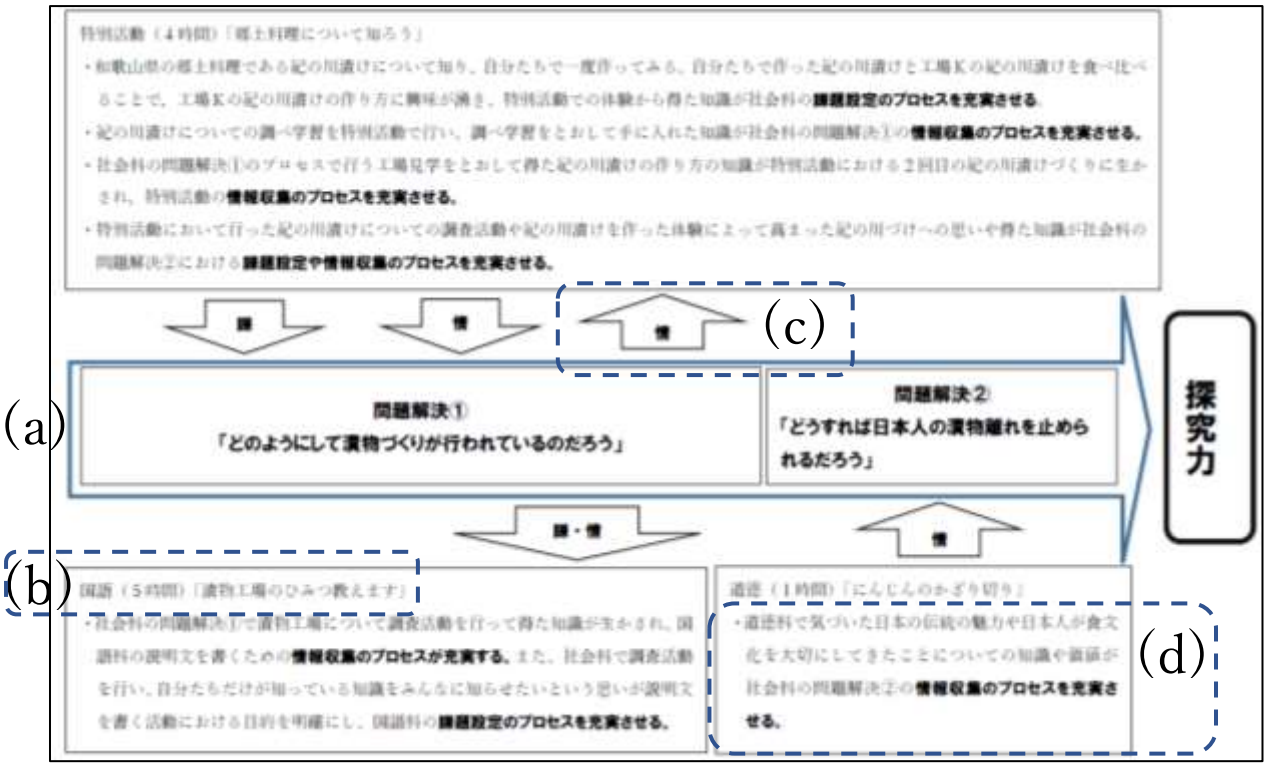


＜図２：CHANGE の知識と国語科の課題設定のプロセス＞

図２のとおり，CHANGE の追究活動をとおして，「ヤギはお世話すればするほど，人になついてくれること」に気づいた子どもたちが自分たちの発見を誰かに伝えたくなったり，ヤギとふれ合う中でヤギのかわいさを知り，ヤギのかわいさを誰かに伝えたくなったりするなど，子どもの**想いや願い**が国語科の説明文を書く**意欲の向上につながったり，目的の明確化につながったり**することが考えられます。このような活用・発揮を**「課題設定のプロセスを充実させる」活用・発揮である**と捉えています。この場合に活用・発揮されるのは，**子どもの想いや願いですが，広い意味で考えると想いや願いなども知識に入る**と考えています。子どもの想いや願いは，自分の想いや願いについての知識と考えることができます。ですから，子どもが自分の想いや願いに沿って学習を進めている時は，知識の活用・発揮が行われている状態であると捉えています。

5. カリキュラム・デザインの方法

最後に，カリキュラム・デザインの方法と留意点について説明します。方法や留意点については以下のとおりです。



（1）方法

(a) 1つの教科等を中心に据えます。

カリキュラム・デザインの全体像の表しやすさから，「研究教科等」か「CHANGE（総合的な学習の時間)」を中心に据えることにしています。

(b)　中心に据えた教科等に関連する教科等を前後に書き表します。

(c)「矢印の根元の学習」で得た知識が

「矢印の先の学習」で生かされ

「矢印の中の課題設定，情報収集のプロセス」を充実させる

に合うよう矢印を書き込みます。

(d)関連する教科・領域の欄に，例えば，「○○の学習で得た知識が▲▲の場面で活用され，□□の学習の～のプロセスを充実させる」のような文言で，説明を書き加えます。

（2）留意点

・扱う「内容」の似た学習（例えば，○○と▲▲）を関連させることで，充実し合うプロセスが増える（矢印の数が増える）が，関連する学習が多ければよいということではなく，有意味な知識の活用・発揮が行われることが大切であることから，関連する学習は厳選するようにします。

・関連する学習を厳選する際には，「子どもの実態から無理なく知識の活用・発揮が行われるもの」，「教師が意図的・計画的に知識の活用・発揮を支援できるもの」という視点を大切にし，厳選するようにします。